

臨床 ERG, 運・鈍・根

三宅養三, 大出尚郎, 篠田 啓, 角田和繁, 木村 至 著

こんなに内容のある, 面白い本は読んだことがなく, しかも知らず知らずのうちにかなりの勉強になった。この本の実現には故樋田哲夫教授の示唆もあったようだが, 対談風にまとめてかつ内容を失うことなく伝えている点ですばらしいと思った。

同じ年齢の同じことをしている人がこれだけのことを成し遂げていると思うと圧倒的な力で押しつぶされ, 先を読むことができなくなる。少しずつ読んで, 自分に言い訳をして, 先を読むという具合で読み進んでいった。それでいて, 内容は大変面白く, 臨床研究が少しずつ結果を出していく様子がよくわかった。それは, 福岡伸一著のベストセラー『生物と無生物のあいだ』を読んだときと同じような面白さであった。偶然とか運というものは, ただ待っていて授かるものではなく, 長い, たゆまない努力の過程で呼び寄せたり, 作り上げていくものであることがよくわかる。つまり, 決して受動的なものではなく, むしろ必然性をもった因果であると感じられる。

本書を読み終えてまず思ったことは, 小国日本の一眼科医がよくぞここまでの成果を上げてくれたという感謝の気持ちである。日本人眼科医の評価を上げてくれたということである。お金がない, 研究に対する評価もない, しかも研究施設も劣悪である。そんな中であって, この分野で世界の第一人者にまでのぼりつめた三宅先生の快挙は日本人眼科医にどれだけの希望を与えてくれたことかと思う。その意味ではすべての眼科医, 眼科を志している研修医にぜひ読んでもらいた

いと思う 1 冊である。

私も研修を始めた頃, 副甲状腺機能低下症から低カルシウム血症になり白内障を起こした患者をもったとき, 白内障になるメカニズムを知りたいと思ったことがあったが, 研究とは指導者とお金がなければできないことを知り, 日本では無理であると悟ったことを思い出す。名古屋大学の伝統の分野, 指導者がいて, アメリカ留学があつて, どうすればいいかを知り, 持ち前の鈍, 根で運を引き寄せ, 見事に結実させたというサクセスストーリーである。

英文本 (Electrodiagnosis of Retinal Diseases, Springer) については, 教科書的な本を書いた理由も十分理解できる。世界的な仕事は世界が理解する言葉で書かなければ意味がない。以前, 英文本の贈呈を受けたときにはよく書いたなあと思ったが, この日本語の本を読むとそれが至極当然であることがわかる。英文本は一昨年 (2007 年) の AAO の年次総会の折に, 売れた本のベストテン入りを果たしたそうであるが, 同僚の眼科医として, こんなに鼻の高いことはない。三宅先生に心からの祝福を申し上げるとともに, この日本語版を実現させてくれた 4 人の共同執筆者の先生方に心から御礼申し上げる。

秋山眼科医院 秋山健一

●B5 頁 212 2008 年

定価 6,300 円 (本体 6,000 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-901808-12-5] 銀海舎刊